

白いキリスト教から黄色い基督教へ

——遠藤周作研究ノート——

杉山 直人*

From White Christianity to Yellow Christianity

——Notes on the Early Pieces of Endo Shusaku (1923~96)——

Naoto SUGIYAMA

Abstract :

Endo repeatedly expressed his awkward feeling towards Christianity (Catholicism in his case) because he did not select it of his own accord. Baptised at the age of twelve under the influence and initiative of his mother and his aunt the novelist continued to harbor doubts over the propriety of Western Christianity. His maiden work "As far as Aden" (1954) and *Yellow Man* (1955) published one year later bring into sharp relief the difference between the Western culture based on the white Christianity as he understood it and the pagan Japanese culture. He is now evaluated among other things for his efforts to find the original novelistic world where the Western Christianity finds the way to develop itself in a distant Japanese religious disposition. This essay focuses on these two pieces as well as *Silence* (1966) to pursue the path this novelist followed towards the establishment of Japanese indigenous Christianity.

キーワード：キリスト教、『沈黙』、「アデンまで」、「黄色い人」

遠藤周作とキリスト教

遠藤周作（1923～96）の世界をふり返ろうとすると、異文化体験が作家に与えた影響を抜きにしては議論がはじまらない。両親に連れられてわたった大連での満州人少年との体験や、昭和25年戦後初のフランス留学生として滞在したりヨンやパリの暮らし、ひとびととの出会いなど、人生の多感な時期を海外で過ごした体験はデフォルメを加えられながら、その後の小説世界を展開してゆく核となったからである。日本を外側から見る目である。漱石の英国留学と「自己本位」にも匹敵する経験だった、とする批評家もいる。（『人生の

同伴者』）

異文化体験の最たるものが、この作家が死ぬまでつきあうことになったキリスト教であることはいうまでもない。キリスト教にたいして漱石は冷淡だった。神とは人間の創作であり、英雄願望を極大化した人間究極の憧憬にすぎぬと喝破した（『文学論』）文豪には、西洋のこの精神的支柱をめぐる特殊な個人的背景がなかったから、それですんだ。だが幼児ではなくて、自我が芽生えて感受性が鋭さを増す少年期に洗礼を受けさせられた遠藤はそうはいかなかった。母郁は離婚とそのちふたりの男の子を育てねばならない暮らしのなかで、カトリック信仰により所をもとめた。信者

*関西学院大学国際学部教授

だった姉の影響がもちろん大きかったようだが、勤務先が聖心女学院だったことも手伝ったのだろうか。自らの信仰を幼い遠藤の心に注入することにより、郁は結果的にキリスト教作家としての彼の将来を定めてしまった。自らの意志で選んだ宗教ではなかったから、どのように折り合いをつけるべきか作家は試行錯誤することになる。その一端について考えることが本研究ノートの目的である。

キリスト教は遠藤をとらえてはなさない。重荷ともなり偽善に見えたりしたこともあったので、なんども捨てようと思ったが「それなのに私は今日もこれにしがみついている。」（「弱虫と強者について」）心理的屈折を感じさせる「しがみついている」という戯画的表現を使っているのがおもしろいが、それでも自らの心を神が支配していることを認めてはばからない。神と人とのかわりは一筋縄ではゆかないが、最後には人は神にとられる、という。だから自らの利益や都合のために最初はキリスト教を利用しようとした者、また自分の置かれた立場によってキリスト教とかかわらざるを得なかった者をどんな運命が待ち受けているかについても作家は明快である。「一度、神とまじわった者は、神から逃れることはできぬ。」（『鉄の首枷』）と遠藤はくり返すが、そこには自分自身の宗教体験に基づいた確信がある。幼児洗礼を受けたらしい小西行長（『鉄の首枷』）、藩命でイエスと付きあわざるを得なかった長谷倉六右衛門（『侍』）など、遠藤が選んだ主人公は作家自身とおなじ宗教体験を経ることになる。もっとも創作の最初から作家はこのような確信に満ちたメッセージを送っていたわけではない。

白い肌と黄色い肌

西欧人（遠藤の場合はフランス人）の肉体そのものと彼らの精神や文化を二千年にわたって支えてきたキリスト教信仰とをめぐり、処女作「アデンまで」（1954『三田文学』所収）と「黄色い人」（1955『群像』所収）は補完しあう。雑誌発表されたふたつの作品が「チバ」と「千葉」という同

名の日本人の視点から語られるのは偶然ではない。白い肌にたいして宿命的コンプレックスともいべき屈折した情念を越えることができない「チバ」（「アデンまで」）は、「黄色い人」になると「千葉」と名前を改め、白い肌の人たちが奉ずるキリスト教にたいして黄色い日本人信者がいだく疑問をぶつけることになる。白い肌と白いキリスト教にたいして黄色い肌が感じる違和感が、ふたつの作品を結んでいる。こうしてわずか一年という時間によって隔てられたふたつの作品は、のちに深められてゆく「肌と宗教」というモチーフが作家のなかで表裏一体となって同時進行していたことを示す。

「部屋の灯に真白に光った女の肩や乳房の輝きの横で、俺の肉体は生気のない、暗黄色をおびて沈んでいた。胸から腹にかけては、さほどでもなかったが、首のあたりから、この黄濁した色はますます鈍い光沢をふくんでいた。そして女と俺との軀がもつれ合う二つの色には一片の美、一つの調和もなかった。むしろ、それは醜悪だった。俺はそこに真白な葩（はな）にしがみついた黄土色の地虫を連想した。その色自体も胆汁やその他の人間の分泌物を思いうかべた。手で顔も軀も覆いたかった。卑怯にも俺はその時、部屋の灯を消して闇のなかに自分の肉体を失おうとした……」（「アデンまで」177～8）¹⁾

フランス人の恋人とはじめて交わした抱擁を帰国途上のチバが回想する場面である。「汚点（しみ）一つない彼女の白い肌」を覆う金髪の美しさに息を飲む彼が発見するのは、ひるがえって自らの肌の醜さと日本人であることの劣等感である。女性のほうではなくて、男たるチバが自らを恥じて灯りを消してしまうのがおもしろい。作家はチバ自身ではないが、日本人の「肌」を海外でそれほど意識することなくなりつつある現在、こうした場面に戦後初のフランス留学生として彼の地で作家自身が味わった思いや体験が与っているこ

1) 「アデンまで」については講談社学芸文庫版を用いている。

とを讀者は感じざるをえない。戦争中に日本人がおかした残虐行為についてもチバは自虐的に語っており、戦争直後西欧人からどう見られるかについて日本人が強く意識せざるを得なかった時代を彷彿させる。

もっとも肌の色をめぐる彼我の差や黄色い肌への劣等感は、恋人との交渉をチバが回想する段階で終わってしまう。多くのページがあてられるにもかかわらず、このふたつのトピックが処女作でいっそう深められてゆくことはない。「黄色い人」を念頭において「アデンまで」をふり返ると、肌の色に拘泥するかわりにキリスト教と異教の断絶という問題に実は作品が方向転換しており、これこそ帰国するチバが千葉となって取り組むべき次なる課題となる。

「アデンまで」は印象深いシーンで幕を閉じる。「四等客室」と称する薄暗い船倉で黒人女が病死する。亡骸はツギのあたった灰褐色の布袋に放り込まれて海に廃棄される。ゴミ扱いである。白人修道女が死者の復活をめぐって祈禱書の一節を読みあげるが、「修道女の読むそれらの白人の祈禱、俺がヨーロッパでたえまなく聞きつづけた人間の慟哭と祈りとは、もはや俺の耳には乾いた意味のない音としか聞こえなかった。」(199)

この水葬が紅海に入ってからおこなわれるのは象徴的である。「アフリカとアラビアに挟まれた」紅海まで進んできた船は、すでに白いひとびとの文化圏をあとにしている。キリスト教文化圏を越えてイスラムや、その先にある東洋の異教世界に足を踏み入れている。地中海のブルーとはちがって海の色も黄濁色となり、その色が自分の肌と変わらないことにチバは気づく。文化と風土が激変し、したがって近代化された西欧世界がもつ明快な秩序は見られなくなり「歴史も時間も神も善も悪もなかった。」そのような文化圏では白いひとびとの祈りは「乾いた意味のない音」でしかない、とチバはいう。ヨーロッパを離れれば、白いひとびとの宗教とは別の世界や宗教が広がっていることを、自らが異教徒であるとの自己認識とともにチバは語っているのである。強調されるのはヨーロッパとその外の世界との断絶であり相互理

解のむずかしさである。両者の異質性が再確認される。恋人との出会いと別れを軸にして白い肌と黄色い肌の肉体的隔たりを語ってきた「アデンまで」は、最後にいたってヨーロッパ人の精神的支柱であるキリスト教信仰をめぐっても、ふたつの肌のあいだに横たわる溝を語って終わる。異教世界に生まれて黄色い肌をもつチバ(「千葉」)は、異教世界と白いキリスト教の両方にかかわって双方の意味を咀嚼理解し、どのように橋を架けねばならないかを模索することになる。これこそ遠藤周作の仕事だった。「ダブダブの洋服を自分の体にあった和服にすること」(『人生の同伴者』)だったのである。

「黄色い人」における「白いキリスト教」

千葉とデュランは「黄色い人」という作品を支える柱である。性をめぐってともに墮落してしまったふたりはテーマ展開とのかかわりはもちろんのこと、物語の構造上からいってもほかの登場人物より重要である。戦争末期、被爆直後の仁川でブロー神父宛の手紙を書き出して物語を開始した千葉は、手紙を完成させることで物語を終結させるし、神父でありながら日本人女性と関係を持ち、彼女との暮らしを軸に自らの体験を日記に綴ったデュランは、そうすることによって物語の中間部を実質化している。

高槻の収容所に移されたデュランの元同僚たるブロー神父の手に千葉をとおして委ねられることになった日記が「白いキリスト教」を考えるために重要な役割を果たす。処女作でチバが口にした「乾いた意味のない音」としての白いキリスト教は、デュランの人生を語る日記をとおして黄色い読者のまえに血肉化されてゆく。

白いキリスト教から見れば千葉や糸子は事実上背教者であり、棄教者とさえみえるかもしれない。二年のあいだ教会にゆかない千葉はブロー神父に会おうともしないし、「時々だけ」ミサには与るといふ糸子も「神さまがあろうがなかろうが、もう、わたしにはかまわないの」と明言する。(「黄色い人」101)²⁾ふたりはともに白いキリスト教にいちどは属しながらも、いまは距離を置

2)『遠藤周作文学全集 6』(新潮社)

いた存在である。こうしたカップルをデュランと併置することによって、西欧キリスト教への同化がむずかしい（と作家が感じている）日本人の姿がよりよく描かれることになる。

「黄色い人」は日本人カトリック作家遠藤周作が白いキリスト教にたいして感じつづけた距離感と不調和感を物語る。八百万神を伝統的に奉じてきた汎神論的日本人には、西欧人がもつ「神と罪」への意識がなるほど希薄³⁾だろうが、でははたして、あなたたち白い人がいっほど人間の「業や罪」は簡単に分類できるのか、あるいは白いキリスト教が定める大罪とはそれほど許されないのか——これらが「黄色い人」の提起する中核的問題である。白いキリスト教への黄色いカトリックの問いかけである。ただし作家自身は「黄色い人」にあっては、この問いへの積極的な答えは出さず、十年後に『沈黙』のなかで黄色い基督教（母なるキリスト教）として自らの思いを吐露することになる⁴⁾。

まずは千葉・糸子とデュラン・キミコという二組のカップル。「アデンまで」が男女関係を肌の色に絞り込んで展開させたのにたいし、「黄色い人」がスポットライトをあてるのは「罪」の問題である。キミコと交わってしまったデュランは言うまでもないが、教会の倫理からすれば医学生千葉も褒められた暮らしをおくっているわけではない。「聖母女学園」（もちろん小林聖心女子学院が念頭にあり）の女子学生だった頃から関係を持ち、それ以来彼女にフィアンセができたあとも、あいかわらず肉体関係を断つことができないでいる従妹が千葉にはいるから。佐伯という名のフィアンセは幼い頃には千葉と同じくミサで待者を勤

めた間柄で信者である。特攻隊員として出撃目の佐伯はクリスマスの夜⁵⁾に彼女に最後に会うために仁川を訪れることになっていたが、それを知りながら千葉は糸子を抱く。彼自身が理解しているようにこれは佐伯ばかりか神への裏切り以外のなにものでもなく、千葉が背教者に堕しているのはデュランと変わらない。

空襲でいつ死ぬかもしれない時代を千葉は生きている。おまけに重篤の結核を病んでもいる。「ながくて六、七年生きれかな」と医学生千葉が思う程に病は進行している。専門的知識があるおかげで千葉にすればよい辛い。空襲と結核という、ふたつの死の影を背負いながら生きる彼が虚無感にさいなまれ刹那主義の快楽を求め続けたとしても、責めるのはむずかしからう。だが作家が問題にするのはこうした糸子との関係そのものではなく、そうした関係を続けることに千葉が「罪のくるしさも良心の呵責も感じません。」とブロー神父に明言することである。「罪悪感も恐怖」も感じないことである。あるいは糸子自身も佐伯を裏切っても平然としていることである。首から聖母のメダイユをかけながら千葉に抱かれることである。「仕方がない」という日本人お得意の言訳を用いながら、自分たちの心理状態を「暗い諦め」とよぶ千葉は、洗礼を受けることによって血肉化したはずのキリスト教倫理が自身を律することができないことを自ら認めていることになる。

白いキリスト教が厳然と保持する罪と神から遠く離れた千葉・糸子とは対照的なのがデュランである。不犯の神父でありながら日本人女性を妻とし、「カトリックの恥」として日本人信者からも石もて追われるこの老人はしかし、正統派キリス

3) キリスト教信仰をとおして少年時代から、たとえば自分に教えてくれたフランス人神父をとおしても西欧と自分たちとの違和感や距離感を感じつづけてきた、と遠藤は言う。西欧人は「故郷に戻っていくようにキリスト教に戻って」ゆける。いわば血のなかをキリスト教が流れており、その DNA が身体に埋め込まれている。だがキリスト教との本能的なまでの絆など日本人には求めるほうが無理というもの。16 世紀に伝わって 17 世紀初頭には断ち切られてしまい歴史的背景をもっていないからである。だから遠藤にとって西欧は「憧れではなく、同時に日常生活において違和感の対象でもあった」ということになる。（『人生の同伴者』39～40）

4) 日本人の体に流れる「汎神的血液」を否定するのではなく、西欧型「一神的血液」との違い、さらには双方の摩擦を作品創作のエネルギーとして持ちつづけることが、若き遠藤の基本姿勢だった。ただし若かったこの頃に彼が語った「一神的血液」と「汎神的血液」を「たたかわせる」というような戦闘的姿勢を『沈黙』での遠藤は棄てることになる。（『人生の同伴者』が『カトリック作家の問題』より抜粋引用 42）

5) 「1944 年のクリスマス」という設定になっているのがわかる。実際には川西航空機宝塚工場が爆撃によって壊滅したのは昭和 20（1945）年夏である。

ト教徒なのである。なぜ背教者を「正統派」と呼ぶかと言えば、明快な罪と罰が彼の行動を支配しているから。デュランは犯した罪の恐ろしさに苛まれつづける。自分が地獄に落ちること間違いなしと日記に書き、自殺用にと手に入れたピストルを「いくたびも」こめかみに押しあてた、ともいう。死ななかったのは恐怖もあっただろうが、自殺を許さない神への従順でもあった。カトリックらしく毎日早朝ミサに与ろうとする。心臓に病を抱えているのに厳冬の朝も出かけるので、帰りは「甲山から吹きおろす氷のような風」を避けるため「仁川橋」の手すりに身を寄せねばならない。祝日にはひとびとのうしろから聖堂にこっそり入ってくるが、めざとく彼を見つけた子供たちが投げる石つぶてのなかを杖をつきながら、「ワタシ、トシヨリデス。ユルシテクダサイ」。この言葉が読者に思い起こさせるのは、踏み絵になんども足を掛けてイエスを棄てたはずなのに真の意味では信仰を棄てられない男キチジローの苦しみと悲しみである。デュランはキチジローと同根である。背教者にして白いキリスト教からみた正真正銘の棄教者キチジローはデュランの延長線上に生まれてくる男である。

「地獄」はデュランにとって現実である。性の掟をめぐってマタイ5章が語るイエスの命令を彼は日記に引用している。「若し、汝の手、汝を躓（つまず）かさば、之を切れ、不具にて生命に入るは、両手あって地獄の滅（つい）えざる火に往くよりは、汝に取り勝れり」この言葉のあとに語られるのは、自分は「地獄の滅えざる火に墮ちるだろう。」という自己認識と呼ぶには熾烈すぎる罪への自覚であり、自分に従ってくれた信者たる「羊の群れ」を神父として裏切ったことへのピューリタンのなまでの自己懲戒である。罪と罰が、彼の心のなかで教会が伝統的に育んできた教えのとおりに生きつづけていることがわかる。大罪を犯したものは救われないのである。

デュランを考えると罪と罰とならんで興味深いのは、日記にあらわれた彼の性欲理解だろう。彼はそれを一瞬の隙を突いて自分を墮落させた

「悪魔」と呼んではばからない。阪神大水害⁶⁾で「両親と妹」を失い茫然自失のキミコを見かねたデュランは、「憐憫」を感じて必要なら司祭館を訪れるよう申し出る。「司祭としての自分の義務と強さを信じていた」彼の善意からでた行為だった。20歳以上年上だったし「中老の私からみれば彼女は、娘のような年格好だった」。下心がなかったのは、キミコが司祭館にやってきたとき彼が「私は非常な当惑を感じた。」と書いていることでも判る。だが結果的に「悪魔は葡萄酒を毒水に変える術を知っている。」とは背教元神父の嘆きである。カナの結婚式で水を葡萄酒に変えたイエスを念頭においた言葉であり、悪魔も悪魔にふさわしい奇蹟をおこなったというのである。善きサマリア人たろうとして、結果的には逆に善意の仮面をかぶった肉の誘惑に虚を突かれてしまったということになる。このあたりのデュランの姿は「理性では神の律法に仕え、肉では罪の原理に仕えているのです。」（「ローマ人への手紙7」フランススコ会聖書研究所訳）と自らの肉体に潜む悪への傾きを嘆いたパウロとも重なっていく。

こうしてデュランは、正統的な白いキリスト教信仰をもっていたものが神を裏切り神から離れてしまったときに、どのような思考回路によって自己存在をとらえ直すかを遠藤流の解釈によって（実際の西欧人がそうかどうかは別として）示すモデルとなる。罪と罰、悪魔の誘惑と墮落、地獄の炎に焼かれる自分など、救いの贖いもなく白か黒かの二者択一世界を彼は生きねばならない。

背教者千葉と「告悔」としての手紙

日本でのキリスト教布教は底なしの沼地に苗を植えるようなもので、いつしか根腐れしてしまう、とフェレイラや宗教奉行井上筑後守は『沈黙』で語る。なぜなら人間を越えた全知全能の神という存在を日本人は考えることができないから、というのである。隠れキリシタンを念頭において井上が言うには、彼らの「奉じておるデウスは切支丹のデウスと次第に似ても似つかぬものになっておる」（『沈黙』235）白いキリスト教は日

6) 実際には昭和13年のことだが、物語のなかでは昭和12年のこととして設定されている。

本の風土文化に土着化するまえに別物となってしまうから本質を失う、という議論である。デュランもまったく同じ言葉をブロー神父に語る。いわく「お前の神はその根をこの湿った国、黄ばんだ人種のあいだにおろせると思っているのか。お前は黄色人がキミコやあの青年のような眼を持っていることに気がつかないでいる。」(129)

「千葉もキミコも、彼等日本人は神なしにすべてをすまされるのだった。教会の苦しみも、救済の願望も、私たち白人が人間の条件と考えた悉くに関心、無感覚、あいまいなままで生きられるのだった。これはどうしたことなのだ。これはどうしたことなのだ。」(130) 日記の最後でデュランは叫ぶように記す。罪と罰を中核とする白いキリスト教の世界に住むデュランにすれば、「なんまいだ」をときに唱えるキミコ（や大多数の日本人）はもちろんのこと、千葉・糸子も同じように「神を知らざりし者達」ということになる。彼に言わせれば「神と罪とに無感覚」で「死にたいする無感動な眼」をもつ異邦人である。こうして自分を破門した教会を憎み教会や日本におけるその布教のあり方を否定しつつけたにもかかわらず神から逃れられないデュランと、神に無関心な黄色い肌のひとびとのあいだには、「黄色い人」を読む限り断絶しかないようにも見える。

だが、この「断絶」をめぐる「黄色い人」を今度は『沈黙』と連動させるとひとつの問題が浮かびあがる。ほんとうに（白いキリスト教から見て）千葉は信仰を捨てたのか。不倫関係を断ち切れず、その意味で教会倫理を破った背徳者たる千葉は「棄教者」でもあるのか、という疑問である。事実はむしろそうではなくて、彼なりの流儀で千葉は信仰の世界へ復帰の歩みを始めているのではないのか、というのがわたしの考えである。そうした千葉の歩みのさきにこそ『沈黙』の世界

があるのではないか。ロドリゴにむかって踏み絵のイエスに棄教を勧めさせることになる、十年後の作家独自のキリスト教理解があるのではないだろうか、と考えるわけである。

「黄色い人」の構成を考えてみよう。すると白いキリスト教からはみ出し者たる千葉が自らの言葉で語った手紙がブロー神父への「告悔」⁷⁾の役割を果たしているのに気づく。物語冒頭、なぜ「ちびた蠟燭の下」で手紙を書いているかを千葉は説明する。まずデュランの死を知らせるためという。つづいて黄色い肌の信者として白いキリスト教への疑問と自らの立場説明がなされる。さきほど触れた白いひとびとと自分との断絶である。重要なのは、そのあとに彼が語ることだろう。順番に整理する——1) 糸子との不倫 2) 白いキリスト教を信じた少年期、大人たちに盲従して「一片の憐憫の情」もないままデュランをいじめたこと 3) 信者から軽蔑され、惨めな暮らしをいまは営むデュランへの憐れみ 4) 彼にそのような生活を強いる「神」への疑問 5) 自分が買い込んだピストルを、デュランが保身目的のためにブロー神父の部屋に隠して憲兵の追及を逃れようとしたこと、またこのピストルをめぐるデュランが千葉と取引しようとしたことをめぐる報告 6) 佐伯の最後の訪問を知りながら糸子を抱いたことにたいする胸の「かすかな痛み」7) 「動きたくないため」に仁川に帰ってきた自分だが、ピストルのことを「クリスマスの前夜、信者たちが罪をのべるように」ブロー神父に教えねばならない、彼を助けねばならないと考えて行動していること、などである。ここでいう行動というのが現に手紙を書いていることであり、またデュランが託した日記を手紙とともに高槻に転送することなのは言うまでもない。

物語がはじまったとき、ピストル不法所持の嫌

7) 遠藤にあっては「告悔」が作品の最後にしばしば登場することに注意したい。『沈黙』のキチジローは転びバテレンたるロドリゴに、『侍』ではベラスコが布教活動で犬猿の仲だったベテロ会神父カルバリオに自らの罪を告白している。ジャンルは異なるが『鉄の首枷』でも行長は処刑まえに「告悔」を望んだ、という。イエス会神父との面会は許されなかったが、そのかわり「群衆をかき分けて一人の切支丹信徒」が行長に近づき、行長の言葉を聞き取ったことになっている。いわく「私は自分の罪を告悔の秘蹟によって浄めることを拒まれたので、その罪を男らしく償おうと努めてきた。……」(『鉄の首枷』261～2) カトリック作家としての創作パターンのなかに、作品の最後は「告悔とゆるしの秘蹟」で仕上げるという構図が組み込まれている、ということだろう。

疑でブロー神父⁸⁾はすでに収容所に送られている。千葉が訪れたとき神父は不在で会うことができず、ピストルをめぐるデュランと自分自身の動きをブロー神父に千葉は伝えられなかった。けっきょくブロー神父に会えなかったという意味では千葉の行動は役立たず、だからこそ彼はながい手紙をしたためることになった。そればかりかデュランのピストル所持に加え、糸子との不倫を含めて自分自身やデュランのことをあれこれとブロー神父に語ることもなったのである。すると逆にブロー神父は不在だったからこそ、千葉やデュランの内面は手紙によって逆に照らし出されることになった、とも言える。さらにこの手紙が収容所にいる神父に届けられて当局の手に渡ることになれば（もちろん「この手紙が高槻の収容所にいる貴方の手に渡るかどうかかわからない。」と千葉が言うとおりが）ブロー神父にたいする当局側の対応は穏やかなものに変化することも予想されよう。そうなれば神父を救いたいとする千葉の当初の目論見はまずは成功、ということになる。

病魔とグラマン機の銃撃さえ体験するほどの身近な死の陰におびえ、虚無的な刹那の快楽に浸る日常だった千葉は、そこから抜け出そうとしているではないか。それまで神はおろか人との積極的なかわりさえ避け、愛に裏打ちされてもない糸子との営みしか行動らしきものを果たすことのなかった千葉は、手紙を書く（つまり告悔する）ことによって虚無の殻を這い出ようとしたのである。クリスマスの前夜、ブロー神父に会いに行った千葉が「（これがこの二ヵ月間の間にほくがはじめて動こうとした瞬間でした）」と手紙に記しているのは示唆的である。「はじめて動こうとした」千葉がめざしたのは「善きサマリア人」として行動することだったし、そのような行動をとらせたのは聖霊の働き、恩寵（「おめぐみ」）だった、ということになる。告悔のあとに神父が与える「ゆるし」はカトリックの七秘蹟のひとつである。信者の告白を神父が聴き、信者の秘密を共有

することによって、神に代わって神父が「ゆるし」を与える行為である。日本人と神のかかわりをめぐり、デュランや千葉自身、また糸子が語る否定的な言葉が重すぎるために、ややもすれば千葉の行動がもつ意味は見逃されがちである。白いキリスト教の外にある神をもたない日本人背教者という図式だけが浮かびあがりがちである。だが幼い頃、信仰生活の導き手として告悔を聴いてくれた神父に宛てて、いまふたたび手紙という告悔をしたため、みずからの罪を認めるという行為をとおして、千葉はクリスマスの夜にゆるしの贖いに与る直前にあるかもしれない。千葉にゆるしの秘蹟を与える権限をブロー神父は白いキリスト教の正統的継承者としてもっているからである。ゆるしの秘蹟はカトリック神父にたいする信者の告悔を前提として成立するのだから、成立要件の半分を「黄色い人」は備えていることになる。

「半分は備えている」としか書けないのが残念なところである。作品のなかでブロー神父は千葉に会えたわけではない。だから神に代わってゆるしを与えることもできはしない。聖霊の働きに委ねるしかない。さらに千葉の手紙は字面を追う限り黄色い人が白いキリスト教を理解することが難しいことを、あらためて強調しているにすぎぬ。ブロー神父のように白いキリスト教の世界で信仰の強者として生きる人よりも、罪を犯すことで黄色い人の世界に踏みこみ、神や罪にたいして鈍感でいられる黄色いひとびとの「魂の秘密」をさぐりあてたデュランなら、まだ「理解できるような気がします。」と千葉はいうから。「貴方のように純白な世界ほどほく等、黄いろい者たちから隔たったものはない。それがこの手紙をしたためさせた、理由になるかもしれません。」という千葉のむすびの言葉をとおして、読者をふたたび物語冒頭に立ち返らせているから。授けられたかもしれない贖いをとおして、この先に千葉がどこに進むのかは未知である。作家は言質を与えない。白いキリスト教と黄色いひとびととの断絶を強調し、

8) ブロー神父の視点から見た「物語」の可能性について言及してある論文に目を通す機会があった。（池内輝雄「『沈黙』の方法——『深い河』への行程」〔『国文学』第38巻10号〕）興味深いアイデアだが、白いキリスト教の模範生たるブロー神父の視点は遠藤にとっては、あまり関心のないところだろう。背教者の心と運命にこそ作家は惹かれるからである。

読者を突き放して物語を終えている。双方のこうした断絶を作家は『沈黙』で乗り越え、黄色い基督教を語ることになる。「黄色い人」の韜晦から『沈黙』の信念吐露へと作家の考えは固まってゆくのである。

「切支丹屋敷役人日記」と岡田三右衛門

『沈黙』の最後に附された「切支丹屋敷役人日記」（以下「役人日記」）を読むのを多くの読者が諦めてきたのではない。現代日本語ではないために読みづらいのである。だが「役人日記」を抜きにしまうと『沈黙』の全体像は捉えられない。寛文12（1672）年から延宝9（1681）年まで、棄教後ほぼ十年にわたって岡田三右衛門（セバスチャン・ロドリゴ）がどのような生活を送って死を迎えたかについて、役人サイドからの証言が抜粋で紹介されるという趣向になっているからである。

ロドリゴとキチジローをめぐるポイントだけを押さえておこう。死亡した岡田三右衛門という男の名をそのまま押しつけられたロドリゴは岡田の妻だった女を与えられて江戸に回送される。名前を日本風に改めて日本女性をめとらせることで、ポルトガルからやって来たカトリック司祭というロドリゴ本来のアイデンティティを幕府は抹消したつもりだったのである。

「役人日記」はしかし、権力によって否定された司祭としての本来の任務である布教活動を、軟禁状態にあっても三右衛門が捨てたわけではなかったことを示唆する。彼と親しかったり世話をした人たち、あるいは下級役人のなかからもキリスト教信仰をもったり、その疑いをかけられた人たちがいたのがわかるからである。喜んで入牢した寿庵は三右衛門とおなじで「転びもの」だったようだが、他にもたとえば同心一ツ橋又兵衛と妻、杉山七郎兵衛の妻、門番徳右衛門といった人たち、それにももちろん吉次郎自身も姿を見せる。切

支丹関連の像やロザリオを不法所持していたとして拷問にあった人たちもでた。このような人たちが相手に三右衛門はどんな役割を切支丹屋敷で演じていたのだろう。たしかに積極的に布教活動をしたわけではなかったかもしれない。だが幕府がもくろんだ司祭としての彼のアイデンティティ抹消は事実として不成功だった。幕府の厳しい詮議を受けねばならなかった切支丹やその疑いのある人物がなんにんも記録されていることは、「全世界に行って福音を伝えよ」というイエスの教えに三右衛門が忠実に生きたことを語るからである。切支丹屋敷に入る直前、「私はこの国で今でも最後の切支丹司祭なのだ。」とロドリゴが長崎でつぶやいた言葉⁹⁾は三右衛門の江戸での十年によって証明されたことになる。

ロドリゴ同様キチジローもまた、彼なりの信仰を貫いたと作品は語る。ロドリゴをユダのように売り渡したキチジローだが、囚われの身となったロドリゴのあとを、五島生まれ（「役人日記」で五四歳のこの男は江戸まで同行し（命じられ？）中間（ちゅうげん）として転びバテレンの世話をつづけた。

キチジローはイエスを売った弟子たちのひとりである。役人のまえで踏み絵に足をかけて信仰否定を繰り返し、あげくロドリゴを裏切った自らの行動は罪としてこの男の心にのしかかった。イエスの弟子たちとおなじである。ユダがイエスを売ったとき、ペテロばかりか多くの弟子も主を「知らない」と弁明して見捨てることになったが、イエスの死後、主に死を誓った弟子たちは自らの卑怯を恥じ、おのれのふがいなさに苦しむ。その慚愧の念と自分を裏切った弟子たちを赦したイエスへの思慕こそが、殉教者としての彼らの勇敢な死とキリスト教宣教への原動力となった、とは遠藤が『イエスの生涯』と『キリストの誕生』で語った原始キリスト教団成立をめぐる解釈である。

キチジロー改め吉次郎となって「役人日記」で

9) 有名な次の一節——「自分は不遜にも今、聖職者しか与えることができぬ秘蹟をあの男に与えた。聖職者たちはこの冒瀆の行為を烈しく責めるだろうが、自分は彼等を裏切ってもあの人を決して裏切ってはいない。今までとはもっと違った形であの人を愛している。私とその愛を知るためには、今日までのすべてが必要だったのだ。私はこの国で今でも最後の切支丹司祭なのだ。そしてあの方は沈黙していたのではなかった。たとえばあの方は沈黙していたとしても、私の今日までの人生があの人について語っていた。」（『沈黙』248）

再登場した彼は、肌身離さず切支丹の護符を身につけていたようである。三右衛門からもらったのか、と役人の詮議を受けた吉次郎は、そうではないと答えている。吉次郎の説明はどうやら受け入れられたようである。すると長崎時代ロドリゴを売ったキチジローは、こんどは「役人日記」のなかでは三右衛門をかばうことになった。自らの弱さゆえに踏み絵を踏むしかなかった（その延長線上に「ロドリゴを売るしかなかった」がくる）と、長崎でロドリゴに嘆いていた吉次郎は、江戸の切支丹屋敷では少なくとも同じ轍はくり返さなかった。主にたいする裏切りを恥じ、慚愧と贖罪意識をバネに強い殉教者へと成長したイエスの弟子たちほどではなくとも、吉次郎は彼なりの意地をみせたことになる。

転びバテレンと黄色い基督教

「役人日記」について書いたのは、『沈黙』がイエスと弟子たちを念頭に置き、転びや裏切り者に光をあてながら、彼らの立場にたいして理解と共感を示す作品であることを改めて確認しておきたかったからである。信仰にはさまざまな形がある。見事に殉教を果たして歴史に名を残した人々ばかりではなく、弱者の信仰というものもあろう、というのが作家の立場である。そうした彼の立場を物語るのが信仰確立への足がかりとして棄教を勧めるイエスの声、という意表を突いた『沈黙』の物語展開であることは言うまでもない。

「他の者は欺けてもこの余は欺けぬぞ」筑後守はつめたい声で言った。「かつて余はそこもとと同じ切支丹パードレに訊ねたことがある。仏の慈悲と切支丹デウスの慈悲とはいかに違うかと。どうにもならぬ己の弱さに、衆生がすぎる仏の慈悲、これを救いと日本では教えておる。だがそのパードレは、はっきりと申した。切支丹の申す救いは、それと違うとな。切支丹の救いとはデウスにすぎるだけのものではなく、信徒が力の限り守る心の

強さがそれに伴わねばならぬと。してみるとそこもと、やはり切支丹の教えを、この日本と申す泥沼の中でいつしか曲げてしまったのであろう」（『沈黙』242～3）

慈悲と救いをめぐる西欧伝来のキリスト教と仏教との違いを、筑後守がみずからの理解に基づいてロドリゴに語る場面である。筑後守にたいして切支丹パードレが語ったとされる説明は、弾圧が厳しさを増して殉教がさし迫った当時のカトリック教会がとった公式見解ということになる。棄教よりは殉教を教会が勧めていたのは周知のとおりである。有名なものでは三つの説教書からなる『マルチリヨ（＝殉教）の栞』がある¹⁰⁾。三つのなかでも特に「マルチリヨの心得」は、殉教にさいし信者たる者の心構えを実践的かつ簡潔に書いてあって判りやすい。例えば「害せらるゝ者、知恵分別ある者ならば、其成敗を辭退せず、心能く堪忍致して受くるに於いては丸血留なり。但し其成敗をいやがりて死するに於いては、丸血留に非ず。」（「第四 丸血留になる程の難儀出て来るに於いては如何にすべきぞという事」166）と言う。殉教こそが真の切支丹たる者の名誉だから、喜んで迫害を受けよと言わんばかりである。これはまさに「黄色い人」でデュランが苦しんだ「罪と罰」を二元論的に問うキリスト教、つまり白いキリスト教の発想と価値観に合致しているだろう。

新約よりは旧約聖書に特徴的なこうした二元論的発想は、ロドリゴに語りかけた踏み絵のイエスの言葉とは異質である——（踏むがいい。お前の足は今、痛いだろう。今日まで私の顔を踏んだ人間たちと同じように痛むだろう。だがその足の痛さだけでもう充分だ。私はお前たちのその痛さと苦しみをわかちあう。そのために私はいるのだから。）旧約の神が怒るときに嫉みを動機として、ひとびとを裁くことが目立つのに比べ、新約で示される神はイエスをとおした愛とゆるしの存在とされる。だからロドリゴに語りかけた踏み絵のイエスが、ひとびとの痛さと苦しみを分かちあい、

10) 姉崎正治『改訂 切支丹宗門の迫害と潜伏』（養徳社）、挾間芳樹「キリシタン信仰におけるマリチリヨと「個」についての一考察」京都大学学術情報リポジトリ（<http://dx.doi.org/10.14989/57712> 2016/8/31）

彼らに寄り添うことを自らの存在意義である、と説明したこと自体にわたし自身はおおきな違和感はない¹¹⁾。問題なのは踏み絵を踏むことを勧めたことである。外からの暴力と命令に屈してもよい、と語ったことである。白いキリスト教からみれば考えられない裏切りと自己否定を許容していることである。

踏み絵のイエスと彼がロドリゴに語りかけた言葉にみられる白いキリスト教の変質をどのように解釈すべきか。力ある父の権威とそれへの服従、つまり罪と罰を基本とする西欧キリスト教とはひと味違う母なるキリスト教をどのように捉えるべきか。この問いにたいする有力な議論のひとつを提供したのは江藤淳だった。ポルトガル人司祭セバスチャン・ロドリゴは「ヨーロッパ人でもなければ「父」なる神の司祭でもな」く「実は日本人」だ（『成熟と喪失』159、166）と喝破したのである¹²⁾。短編「私のもの」を採りあげた江藤は両親の離婚が作家にとってのトラウマであったことを見抜いた。父にたいする反発と二人の息子たちを苦勞して育てた母郁にたいする作家の思慕が、母への罪悪感とゆるしへの願望を遠藤の描きだすイエス像に反映することになっている、と論じた。男であるはずのイエスが「女性化（母性化）」（江藤）された、というのである。作家の生い立ちと作家の分身たる作中登場人物とを絡めあわせた鋭い解釈であった。江藤の炯眼ぶりを認めた遠藤はのちに、自分のなかにある「〈母なるもの〉」は「思想じゃないんですよ。無意識なんです。」（『人生の同伴者』141）と認めることになる。

江藤の議論は遠藤批評のなかでも、おそらくもっとも示唆に富むもののひとつであろう。だが、わたしにはふたつひっかかることがある。ひとつはロドリゴが達した境地をプロテスタンティズムではない、と解釈していること（『成熟と喪失』XXV）、ふたつめには、踏み絵に足をかけるに至るまでのロドリゴが、ヨーロッパ人として描かれ

ていることについて、江藤は多くを語ってはいないように見えることである。ふたつは個人の信仰と日欧文化という裏表の関係である。

キェルケゴールやルターを研究したエリック・エリクソンを読んだ江藤は、ルターの宗教改革がつくりあげた「理想の女性像」は「中性化した女性、あるいは男性を模倣しようとする女性のイメージである」と明言する。宗教改革ののちにやがて出現する「近代産業社会の労働力となるにふさわしい女性、つまり女性であることを嫌悪して限りなく男性を模倣しようとする女性の原型」（『成熟と喪失』162）を生みだし、聖母マリアに代表される伝統的な母性を追放したのがプロテスタンティズムである。だからロドリゴが対話を交わした「母なるイエス」はプロテスタンティズムの基本精神からほど遠い、という結論を導きだす。

いっぽう作家自身はロドリゴとプロテスタンティズムとの関係について明快である。『沈黙』あとがきで「ロドリゴの最後の信仰はプロテスタンティズムに近いと思われるが、しかしこれは私の今の立場である。それによって受ける神学的な批判ももちろん承知しているが、どうにも仕方がない。」（『沈黙』256）と書いている。こうした遠藤の言葉を知らないはずがないのに江藤はロドリゴのプロテスタンティズムを否定しているのである。なにやら作家の言葉を見做しているようにもみえる。思うにロドリゴの信仰がプロテスタンティズムに近いと遠藤が言うのは、彼が自らの意志でローマ教会の正統的教義から外れたことによって、ローマ教会の権威を認めなくなった、という程度の意味ではないだろうか。自らの棄教をめぐる確信犯たるロドリゴは確かに反ローマ的ではある。いっぽう江藤はロドリゴが踏み絵のイエスに発見した母性とプロテスタンティズムとの関連に焦点をあわせて議論を進めているわけで、「プロテスタンティズム」という概念をめぐるどの部分に焦点を当てたかにより、作家と評論家との立場が噛みあっていない印象を受ける。

11) イエスは実際に語ったのか、語るべきではなかったのではないかと、またロドリゴが踏み絵を踏むまえではなく、あとで語るべきではなかったか、といった議論がある。詳しくは辛承姫（シン・スンヒ）『遠藤周作論 母なるイエス』第3章（専修大学出版局）

12) 『新装版 成熟と喪失 “母”の崩壊』（河出書房新社）

評論家の指摘どおり、棄教をめぐるロドリゴの心理の動きは作家遠藤周作の個人的生い立ちと分かちがたくかわっているが、いっぽう同時に作家は自らの体験とは一定の距離をおき、ロドリゴと彼の棄教をとおして西洋と日本を対比的に描いている。個の世界と日欧の文化比較とがきしみなく統合されているのも事実なのである。

『沈黙』のテキストは冒頭、ローマ教会がフェレイラの棄教を個人の問題というよりも「ヨーロッパ全体への信仰と思想の屈辱的な敗北」(7)だと解釈したことを読者に伝える。自分を指導してくれたフェレイラに個人的思いがあるポルトガル人司祭ロドリゴの立場はローマ教会ほど紋切り型で公式的ではないが、それでもやはり「異教徒の前に犬のように屈屈したとはどうしても信じられ」(8)ない、という。フェレイラの棄教を屈辱とを感じる点ではローマ教会となんら変わらず、宗教におけるヨーロッパの優位をロドリゴも信じて疑わない。

日本に到着した頃のロドリゴは自信にあふれ楽観的だった。イエスの命に従って福音宣教を使命と心得ており、弾圧下の信者たちを司牧することの意味を深く考えることもない。だが彼のこうしたナイーブな使命感は、過酷な弾圧の現実をまえに揺らぎだす。自分たちの存在は信者を救うことにほんとうになっているのか。自分たちがひとびとを指導することで、彼らの犠牲が逆に大きくなっているのではないか。だとすれば司祭とはいったいなにか。こうしたロドリゴの疑問は、やがて宣教師として心に抱いてはならない究極の問いにまで彼を追いやることになる——信者が苦しんでいるのに、なぜ神はなにもしないのか、なぜ沈黙しつづけるのか。ロドリゴ（そしてフェレイラ）はそれまで築いてきた自己存在基盤としての神への疑問に襲われる。文字通り宣教師とし、ひとりの西欧人としてのアイデンティティの危機である。

変貌するイエスの顔と日本的イエス

ロドリゴの心理的な揺れを作品中で如実に語ってくれるのは、彼の目に映るイエスの顔である。『沈黙』のテキスト校訂研究本として2004年に出

版された『遠藤周作「沈黙」草稿翻刻』が「イエスの顔」について作家自身の明快な言葉を紹介している。孫引きになるが引用しておこう。

『沈黙』という小説は、そこにさまざまな主題が含まれているために、いろいろな批評家から、さまざまな解説や分析を受けたけれども、私にとって一番大切なことは、外人である主人公が、心にいっていたキリストの顔の変化である。私の主人公は、心の中に力強い威厳のある、そして秩序をもった、秩序が支配するようなイエスの顔を心に持っていた。それは西洋の芸術家たちが考えてきたキリストの顔である。そのようなイエスのイメージを持ちながら、日本に上陸してきた。そしてまたその力づよいキリストの顔に勇気づけられながら布教をはじめる。しかしさまざまな困難や挫折のうちに、彼はついに捕らえられて、踏み絵の前に立たされた。彼がはじめて日本で見た、日本人の手によって作られたキリストの顔は、彼がヨーロッパ人として考えていた、秩序があり、威厳があり、力強いキリストの顔ではなくて、くたびれ果てた、そしてわれわれと同じように苦しんでいるキリストの顔だったのである。(上掲書357)

ロドリゴがみた踏み絵のイエスとは日本人の宗教的感性に基づくイエスである。男性的イエス（父なる神）を非西欧的文化背景、日本的宗教コンテキストのなかに置いて解釈しなおしたものであり、日本人の文化的精神性が発露されたものとしてヨーロッパ人たる彼のまえに置かれたのである。だから、踏み絵にたいしてどのように反応するかは、たんに切支丹であるかどうかを見分けるための宗門リトマス紙であるばかりでなく、それを見るヨーロッパ人の心が日本の風土にたいして共感できるかどうかを問いたです試金石にもなる。西欧がもつはずの宗教的優位にたいして日本文化が挑戦した異文化衝突の最前線こそが踏み絵¹³⁾だったのである。ロドリゴが踏み絵から受入れたイエスは彼自身の苦しみを共有してくれる

同伴者としての日本的イエスである。漱石の言った極大化された英雄とは対極の神、自身と人間とのあいだにある落差をゼロとした存在、西欧人が崇拜する神の絶対的高みを自ら否定した存在である。

おなじように踏み絵に足をかけてもフェレイラはイエスの言葉を聞くことがなかった。白いキリスト教に踏みとどまったからである。フェレイラはデュランを彷彿させる。背教者としてともに掟を破ったふたりは、唯一絶対神にたいする忠誠をもとめる白いキリスト教が汎神的風土をもつ日本の文化土壌には適さない、と主張して仲間の宣教師を冷笑する。裏切り者という自らの意識が重荷となつてのしかかるために、居心地の悪さを和らげようとして白いキリスト教の布教方法を批判するわけだが、そうした批判自体、ふたりが実は白いキリスト教の枠組みを超越できないことを語る。

「なぜ神さまのことや教会のことが忘れられへんの。忘れればええやないの。あんたは教会を捨てはったんでしょ。ならどうしていつまでもその事ばかり気にかかりますの。・ ・ ・」(『黄色い人』120)

キミコがデュランにいう言葉はそのままフェレイラにもあてはまるわけで、西欧人と白いキリスト教との親和性は棄教によっても容易に氷解するものではない。

弱者としての自己弁護に終始するデュランと比べると、フェレイラはあざとさが際立つ。やむを得ず命に従って反キリスト教の論文を書くばかりでなく、裏切りの反動として積極的に信者を売り渡す手先となることに活路を見いだしているから。日本人信者ばかりか、長崎に寄港するプロテスタントのオランダ商船に潜むカトリック信者さ

えもあばこうとするなど、その非道ぶりはオランダ商館ヨナセンが日記のなかで日本名沢野忠庵を「この神を忘れた悪漢」と罵っているほどである。自らの存在価値を自分自身に納得させるために毒を食らわば皿までも、という裏切り者特有の心理がなせるわざである。

白いキリスト教からすればロドリゴもしょせん背教者にすぎないのだが、彼は自らの師であつたフェレイラを越えている。ふたりが踏み絵に足をかけたそのときが、分かれ道だつた。いっばうは裏切りを重ねることで自らの過去を否定する虚無に身を沈め、もう一人は自らの信仰を確立する足がかりを得たのである。

踏み絵が突きつけてくる日本的イエスとロドリゴが対話に成功したことは、とりもなおさず彼が日本人信者と彼らの文化にたいして寛大さと柔軟さを兼ね備えていたことを示す。開かれた心をこのポルトガル人はもっていた。キチジローの裏切りにあいながらも、ロドリゴはまわりの日本人たちの暮らしぶりを受け入れ、「役人日記」が語るように彼らに共感を見せている。「あのキチジローと私とにどれだけの違いがあると言うのでしょうか。だがそれよりも私は聖職者たちが教会で教えている神と私の主とは別なものだ」と知っている。」(『沈黙』229)ロドリゴが言う「私の主」とは日本的イエスであり、その意味でロドリゴは白いキリスト教から黄色い基督教への改宗者なのである¹⁴⁾。フェレイラや一度は信仰をもっていた筑後守自身が諦めたように、白いキリスト教は日本では育たないのかもしれない。キリスト教信者は今でも人口の一パーセントを低迷している。だがほんとうに日本は「どんな苗」も育つことがない底なしの沼地のような国なのか——この問いにたいする『沈黙』の答えは否である。たしかに白いキリスト教は根腐れするかもしれないが、キリスト教信仰にはさまざまな形がありえる。黄色い基

13)「日本人の細工師」がつくった踏み絵のイエスは「威厳と誇りをもった基督の顔ではなかった。美しく苦痛をたえしのお顔でもなかった。誘惑をはねつけ、強い意志の力をみなぎらせた顔でもなかった。彼の足もとのあの人の顔は、痩せこけ疲れ果てていた。」(『沈黙』230)

14)「自分は布教会から追放されているだけではなく、司祭としてのすべての権利を剥奪され、聖職者たちからは恥ずべき汚点のように見なされているかもしれぬ。だがそれがどうした。それが何だというのだ。私の心を裁くのはあの連中たちではなく、主だけなのだと彼は唇をつよく噛みながら首をふる。」(『沈黙』228)

督教への改宗者でありながら、司祭として一生をおくったロドリゴの姿をとおして作家はそう語っている。「信仰者とはたえず挫折し、神を見失い、また神を追いかける人であろう。」（『切支丹時代殉教と棄教の歴史』220）という作家自身の信者理解がロドリゴやキチジローの人生には読みとれる。弱い者には弱い者なりの信仰がありえることを『沈黙』は訴えているのである。

参考文献

- 池内輝雄「『沈黙』の方法——『深い河』への行程」
〔『国文学』第38巻10号〕
江藤淳『新装版 成熟と喪失“母”の崩壊』河出書房
新社 昭和63年
遠藤周作『遠藤周作文学全集 6』（新潮社）
——『切支丹時代 殉教と棄教の歴史』小学館ラ

イブラリー 1992年

——『白い人 黄色い人』講談社学芸文庫 1996年

——『沈黙』新潮社 昭和41年

——『鉄の首枷—小西行長伝』中央公論社 1977年

遠藤周作／佐藤泰正『人生の同伴者』講談社 2006年

遠藤周作文学館〔企画〕藤田尚子〔編集・解説〕『遠藤

周作「沈黙」草稿翻刻』長崎文献社 2004年

姉崎正治『改訂 切支丹宗門の迫害と潜伏』養徳社

昭和24年

辛承姫『遠藤周作論 母なるイエス』専修大学出版局
2009年

挾間芳樹「キリシタン信仰におけるマリチリヨと「個」
についての一考察」京都大学学術情報リポジトリ
（<http://dx.doi.org/10.14989/57712> 2016/8/31）